



利根山光人  
生誕 100 周年

# 利根山光人

Toneyama Kojin

## 記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和2年度後期企画展 **教育は絵のごとく** ちだひろぶみ **千田浩文展** 11/30(月)まで

### 白いキャンバスに向かって

全般に色鮮やかな落ち着いた風景画の中に、絵本の挿し絵のような空想画な心象風景も目を引く。何人かの画家のグループ展ではないかと錯覚するほどタッチが多彩であるのもこの企画展の面白さである。

千田浩文氏曰く、「見ている学生たちに、絵画とはいろいろな手法があるものだという事をわからせたくて、あえて自分のスタイルに固執はしていない。」

と、あくまで教育的視点に貫かれている。

「いわゆる荒れた時期もあり、近隣校の痛ましい事件や事故など教育界は必ずしも平穏ではなかった。」と地元の高校教師時代を懐かしそうに振り返る。

美術の専門教育を受けて確かな感性や技術を培いながらも、高校教育中心という軸はぶれることなく、校長として退任するまで46年間にわたる同校での教職生活を全うした。

マスクを取ってニッコリ！「私わかりますか？」と問いかけるかつての教え子さんに笑顔で答える千田先生。開幕後ひと月を経て、元同僚や教え子の方々の来館も多く、展示室での話題は尽きない。

「教育も絵のごとく、白いキャンバスに描くようなもの。」と氏は語る。

教師が自ら変革を目指して生徒に向き合うことと、白いキャンバスを前にした画家の心踊る心境は、どちらも「原点」として違いはない。

氏の姿勢からは、利根山光人画伯が「ビックリ人間」と呼ばれるほど、生涯少年のような素直な心を忘れない画家であったことも想起させる。

退職後は本館専任研究員として、そして絵画教室の講師として芸術文化の発信拠点を築き上げてきた。

ぜひ館に足を運び、直接氏のバイタリティーに触れていただきたい。

(専任研究員)



多彩なタッチの絵が並びます

### 絵画教室を終えて。受講生の感想

コロナの影響で6月スタートとなった利根山光人記念美術館絵画教室でしたが、10月末を持って10回の講習を無事終え、7名の受講生が修了証を手に入れました。

- ・絵に対する興味の幅が広がったので、次回は自分で美術館等へ足を運んでみたい。
- ・5か月間の少人数の講習を無料で受講することができたのはとても幸運だった。
- ・無心で描くことはこれまでなかったので、心のリフレッシュになりました。
- ・皆さんの絵を見ながら、個性があり一人一人の表現の仕方が面白いと思いました。



完成した作品と講師(左)、受講生の皆さん

- ・美術の楽しみ方が広がり、美術史にも興味が持てました。
- ・「頭の中で整理する」「面とらえる」ということは今まで考えたことがなかったので、とても勉強になった。
- ・油絵の楽しさやおもしろさを発見できてとても良かった。

### 修了生による 作品展のお知らせ

日時 令和2年  
11月16日(月)  
～29日(日)

場所 北上駅西口前  
おでんせプラザ  
ぐろーぶ3階  
生涯学習センター  
ミニギャラリー

時間 10:00～21:00  
(16日は13時～、  
18・23日は休館)

## ～@TONE美～ 『太郎さんと光人さん』 その4

(前号からの続き)

地元に住む人間にとって地元の文化が外部からどう見られているかというのは非常に気になるところで、では光人さんが岩手の民俗芸能を具体的にどう評しているのだろうか、関する文献を探せど具体的につっこんだ批評なり感想はほとんど見当たらない。

唯一、表紙に鹿踊りの絵を描いている「郵政」という雑誌の「表紙のことば」という欄に、「鹿踊りは岩手の山中に残る民俗芸能で一度見ただけなのに強烈な印象を持っている。」という、実にあっさりとした一文が見当たる。マヤ文明や社会批評の著書・寄稿の多さに比べるとややがっかりではあるが、まあそれ以前に、鬼剣舞や鹿踊りをテーマにこれだけの作品を残してくれているのだからその感動は十分伝わるわけだが……。



さて、太郎さんかというと東北の旅において、見て、聞いて、撮って体験した数々の想いを批評精神鋭く表現している。「日本再発見-芸術風土記-」に記された「岩手」を紹介したい。

「まず私の心に戦慄的に挑んできたイメージ、それは馬だった。……馬はシャーマニズムとも深い関係がある。……この動物は宗教的神秘に結びついている。」

まず、岩手と言ったら馬の文化だと言い切る。そしてシャーマニズムと言えば、まさに光人さんのマヤの世界へとイメージはリンクし、著書「マヒコ・メヒコ」にもたびたび語られる。

(※シャーマニズム：巫女や祈祷師によって成立している宗教や現象)

「東北現代文化の代表みたいに押し出されるのは、いつでも啄木だったり、賢治だ。あゝ、いうひ弱なものが、いつの頃からこの地方の伝統になってしまったのだろうか。いかにも馬に対して面目ないではないか。……第一、文学としても程度が低い。……賢治はまだマサ目の通った素材そのものよさに触れる感じだが、それだけだ。」

と太郎さん、このくだりは実に容赦ない！

賢治はともかく、啄木については書くのはばかられるほどにコテンパンだ。

こうして岩手を鋭く洞察する太郎さんは岩手の旅のラストで民俗芸能をこう書いている。

「私はここでまた別の面から、強烈な印象を受けた。それは鹿踊りと、鬼剣舞である。鹿踊りについては、私ははじめから、かつての縄文文化人がシカの肉を常食にしていた時代の呪術的儀礼からの伝統だとにらんでいた。ちょうどアイヌの熊祭りと同じように。……ドライなジャズの出だしとちょっと似ている。ジャズは体がうきうきと動き出してくるが、こいつは精神がテンドーしはじめる。……人間が動物を食い、動物が人間を食った時代。あの暗い、太古の血の交換。食うことも食われることも、生きる祭儀だった。……」

鬼剣舞はこれに比べればずっと時代は新しい。念仏踊りの系統を思わせるがスポーティーで歯切れの良い妙技だ。

双方を通じて言えることだが、その空間的な舞踊性は日本では珍しい。……このリズムカルな空間構成こそ舞踊性だ。」

(※『日本再発見-芸術風土記-』『岩手』)

と、賢治や啄木のこき下ろし方に比べれば大絶賛であり、光人さんに比べればかなり執拗な追求で岩手を語ってくれている。

(次号に続く)

専任研究員



### 冬季休館のお知らせ

- 冬季休館期間・2020年12月1日(火)～2021年3月31日(水)
- 来年度の開館・2021年4月1日(木)からとなります。
- 休館中のお問い合わせ先・北上市まちづくり部生涯学習文化課

発行 北上市まちづくり部生涯学習文化課

〒024-0061 岩手県北上市大通り1-3-1 電話 0197-72-8304 FAX 0197-63-3121